心肺蘇生法に神様は必要か？

「『ジコンソセイジュツ』？」

　聞いたことのない単語に、思わず聞き返す妖精モドキ。

　事の真相を話すにあたり、ゼウスはまず最初に、どうして自分が殺してしまったはずの彼が生き返っているのかについて説明していたのだ。

「その術のお陰で、あの人は生き返ったと？」

「そう、『』ね。この術はお姉ちゃんから教わったものなんだけど、死んでしまった者の体に、自分の魂を入れることによって、生命活動を復活させる術なんだ。彼を……殺めてしまった時、私はそれを使ったの」

「は……はぁ。えっと、つまりですね。今、ゼウス様の魂はあの人の体の中、とういう事なんですか？　それで今まで姿がお見えにならなかったのは、そのせい？」

「そういう事。私自身は彼の体の中に閉じ込められちゃって、自分の意思で自由に外に出たりはできないんだけどね。その代わり彼の体は、私の魂が入っていることを除けば、死ぬ前となんら変わらないし、彼が聞いた話とか、見ている景色とかは、私にも伝わってくるんだ。だから、あなたがちょとひどい目にあったことも、今までずっと二人が私を探していた事も知ってる。心配をかけちゃってごめん！」

　それを聞くと、妖精モドキははぁー、っと息を吐くと、頭を抱える。その意味が分からず、手を合わせていたゼウスは頭上に『？』を出しているが。

　ゼウスは、妖精モドキの住んでいる世界に八人いる神様の内の一人である。今二人の世界は少し面倒事を抱えており、それをどうにかするために二人は自分の世界を出たのだ。しかし途中でトラブルがあり、たまたま今はこの世界にいるのである。つまり、ここに長い間留まるつもりはゼウスにも妖精モドキにも無い。

　しかし、今ゼウスは『自分の意思では彼の体の中からは自由に出ることが出来ない』と言った。これが何を意味するかは、言わなくても分かるであろう。最悪……というより必然、彼を自分達の目的に巻き込む事になる。それが如何に危険な事か、ゼウスが分かっているかどうかは、少し怪しいところだ。

　確かにこっちの世界に来た時、事故とは言え人を殺してしまったことに動揺してしまったのは仕方が無い。冷静に対処しろという方が無理な話だ。だが……それでもゼウスの選択は最悪といっても過言では無い。咄嗟に思いついたのがその術を使う方法だとしても、もっと慎重になるべきだった。若くしてその座に就いたせいか、ゼウスはまだ未熟だと言わざるをえない。まぁ、これはゼウスに限った話では無いのだが。

　妖精モドキが溜息を吐いたのは、それが理由である。

　しかし、今それについて文句を言っても仕方の無いことだと諦めた妖精モドキは、取り敢えず他に聞きたいことを尋ねる。

「先程おっしゃっていた事はよく分かりました。今、ゼウス様はあの人の体の中にいらっしゃるのですね？　それで、自由に外には出ることが出来ない。実質、存在を消してしまった、という訳ですか。では……今、何故ゼウス様は私の前にいらっしゃるのでしょうか？」

　そう聞きながら、妖精モドキはゼウスの体を眺める。パッと見、今までと特に変わった所は無い。

「えぇっとね、これもさっき言った『自魂蘇生術』の力。この術で復活した相手の心臓が止まっている間だけは、私は外に出ることができるの。あくまでも『心臓が止まっている間』であって『死んでいる間』って訳じゃないんだけどね。死んじゃったら、私も死ぬみたい。お姉ちゃんが言ってた。でも、外に出た時の私は、今までと変わらないよ？　ちゃんと戦えるし、さっきやったみたいに『』も使えるし」

　『神言』とは、さっきの戦いでゼウスが使った『』のようなもので、早い話が魔法の一種だ。

「しかも身体能力とか『神言』とかは、ちょっとパワーアップしてた。これも『自魂蘇生術』の効果なのかな？　お姉ちゃんに聞いておけば良かったよ」

　と言いつつも、少し嬉しそうなゼウス。どうやら彼女は、事の重大さに気がついていないらしい。

　再び溜息を吐きそうになる妖精モドキだが、そこでふと、ゼウスの発言の中に重要な情報があったことに気が付く。

「あの、ゼウス様？　つまり、あの人は『心臓が止まっている』だけで、まだ『死んでない』のですか？」

「……あぁっ！　そうだった！」

　今まで忘れていたのか、とでも突っ込みたくなるくらい叫ぶゼウス。彼女は急いで、倒れた瞬に駆け寄った。妖精モドキも慌ててそのあとに続く。

「な……何をなさろうと？」

　倒れた瞬の顎先を持ち上げるゼウスに、妖精モドキは怪訝そうな顔で尋ねる。妖精モドキには、今ゼウスが何をしようとしているのか、皆目見当もつかなかった。

　だが、その問にゼウスが答えたのは、少し後だ。だが妖精モドキの振り返ったゼウスの顔は少し微笑んでおり、それが何故か妖精モドキを不安にさせた。

　そしてゼウスの口から出てきた単語は、またしても妖精モドキが聞いたことの無いものだった。

「何……って、『心肺蘇生』だよ」